

メッセージ題 「いつも喜んでいなさい」 牧師：秋山 義也

聖書：テサロニケの信徒への手紙一 第5章12～28節

・テサロニケの信徒への手紙一を続けて学んできました。本日は、その結びのところとなります。12節の「兄弟たち」というパウロから、テサロニケの教会の人たちへの呼びかけがあります。本日の12～28節において、「兄弟たち」という言葉が5回でてきます。テサロニケの手紙を通しては、もっと多いです。(5:1、4:1、4:13、3:7、2:17、2:1) 何度も「兄弟たち」と呼びかけています。彼パウロからしてみたら、テサロニケの人たちは、信仰の後輩に当たります。教会の人々にとっては、パウロは宣教師であり、教会創立者であり、偉大な教師でした。しかし、その関係性は「主にある兄弟」に尽きるのです。どちらが上、どちらが下、も関係ない。先か後かも関係がない。主によって召し出され、主を受け入れ、主を信じ、イエス・キリストを宣べ伝えるという、同じ目線による交わり、正に「兄弟」なのです。新しい『聖書協会共同訳』の聖書では、「きょうだい」とひらがなで表記されています。男も女も関係ない。子どもも高齢者も関係ない。パウロにとって、皆が等しく「きょうだい」、神の家族だと言うのです。12節の呼びかけにおいても、「お願いします」と言っています。その気になれば、「命令だ」と言えたかもしれません。しかし、そのような言葉遣いを彼は愛の共同体、教会で用いることはありません。

私たち「バプテスト」教会が、起った時、それは1600年代のイングランドにおいて、と考えられていますが、国教会に対する分離から始まった故に、専門の牧師職にある人、そこで学んだ人を牧師として立てることができませんでした。代わって、教会を作る一人ひとりが、御言葉と祈りの務めに当たりました。牧師は大体、「兼職」をしていました。その当時に残っている、呼び方は、「パスター（牧師）〇〇」ではなく、「ブラザー（きょうだい）〇〇」だったという事です。御言葉を語る事、その働きの敬意を忘れずに、かつ御言葉を語る者も聴く者も、主なる神様が語る御言葉こそに敬意を表す意味では、「きょうだいたち」という呼び方、その思いを、私たちもこのテサロニケの教会にならって、大事にしたいのです。

・パウロがしたためた、手紙の最後。その結びの願いとは、教会にいる相互の人々を覚えて、大切にしようよという勧めでした。これまで、テサロニケの教会の人々は、主イエスを信じることで、また宣べ伝えることの中で、礼拝を献げることや、祈ることの中で、多くの忍耐を要する苦難にあってきました。迫害をする者や、無関心の者、他の神々を持ち出し、それを押し付けて来る者、様々な人々との望む、望まないに関わらず、出会いがあったでしょう。しかし、そのような中で、彼らは教会における信仰の交わりを大切にし、励まし合って歩んでいたのです。

このような彼らの信仰の有様を見て、その教会を一緒に立ち上げたパウロ自身が大変励まされ、また神に感謝して、この手紙を書いていることをこれまで私たちはこの手紙を共に学ぶ中で教えられてきました。しかし、その最後に、彼らが苦しみの中にあっても、教会の一人ひとりを大切にしようと伝えるのです。それはまた、役職の違いから起きる不一致や、無理解。キリスト者とそうでない人への不平等を避ける思いが現れています。

・教会では会衆の祈りによって、預言する者や、教える者、世話をする者、いろんな奉仕をする人がたてられ、用いられてきました。パウロは他の手紙でもしばしば、霊の賜物を求めるように勧めています。神様から与えられる働きの違いがあるのです。しかし、それはいのちの優劣でもなければ、年長者が偉い、信仰歴の少ない者は偉くないというような区別をもたらすものではありません。それぞれ神様が与えてくださったいのちとして受け、大切にしようと言うのです。教会の中で導き、戒めている人々、その働きにある人を大切にし、尊敬するようにと言われています。

・私たちの教会では、8月2日に、臨時総会を開催することにしています。コロナウイルスの影響により、これまで延期してきた事柄、計画や報告、予算や決算の審議や執事選挙を行うことになっています。新しい方式を導入して、尚且つできるだけ対話の線を確認したいと思って準備してきました。どうぞ、一人ひとりお祈りいただき、出席・委任のどちらに際しても必要な書類を提出いただきたい。言葉をいただきたいと思っています。

私は今日、執事選挙を前にして、3つのことを皆さんにお分ちしたいのです。私がこれまで35年間、バプテスト教会で育てられてきた出会いからの話です。

・1つ目は、A教会と出会いです。A教会は、牧師から大きな傷を受けていました。牧師が神の名を語りながら「ねばならない」と正しさを語る。今でいう信仰のパワハラ信徒たちは受けているように、私には感じました。その牧師は、教会の分裂と共に教会を去っていきました。残された教会に、新しい牧師が立てられました。私はその牧師が、何を語るのか学びたいと思い、神学生時代に研修させていただきました。教会に残った信徒の方々は、前任の牧師に対して、不平・不満がたまっている人も多かったですから、私はよく「前任牧師の悪口」を聴くことになりました。しかし、その後任の牧師先生は、その度に、にこやかな顔をして言われるのです。悪口を迎合するのでもなく、非難するのでもなく。「その牧師をもまた、神が立て、そして私たち教会が立てた牧師ですよ」と語るのです。わたしはいつもこの言葉によって、力をいただいています。私たちは祈ります。でも本当に神の働きに信頼しているのでしょうか。神によって信仰の与えられた自分を認識しているのでしょうか。教会は人の集まりです。もっと言うと、罪人の集まりです。ともすると、「私たちが選んでやった牧師」という傲慢が生まれます。そして、牧師の側も、「きょうだいたち」ではなく、「私のしもべ」としてしか教会の人を見られなくなる、そのようないびつな関係ができてしまうことがあるのです。今日、心から尊敬しなさい、という言葉は、選ばれた人の側から言うべきことではありません。むしろ、皆一人ひとりが、大切な神様からの贈り物であり、いのちであり、あなたも、そしてこのわたしも、イエス様のしもべ、という下からの視点を持ち得る中で、尊敬は自然と生じてくるものなのです。先ほど、A教会の牧師の例を話しましたが、これは執事とそれを立てる教会全体に言えることでしょう。わたしたちは「神のなされること」(24)に、信頼して、牧師や執事が過ちを犯したときに、しっかりと苦言を言い合える平和の関係を大切にしたいと思います。またその言葉遣いの中で、「相手を変えてやろう」という思いではなく、「神と、そして自分が立てたこの人」という、神への信頼と自分を省みる思いをもって、私たちは互いに愛し、仕え合いたいのです。

・2つ目の話は、B教会での話です。B教会は、それまで会衆の中で割り和高齢の方が執事を担うことが常となっていました。しかし、若い人たちも育ってきている。いや、私がそこで経験したことの中では、教会全体の使命として若い人たちを育てようという機運があったのです。そのような文脈の中で、執事選挙の総会が行われた際、これまで執事経験があった高齢の女性、皆から慕われていた1人の方が、こう発言されたそうです。「私は、これから若い人に教会を担っていただきたい。そして、私は惜しみなく、その選ばれた執事をどんな時にも支え、協力します」。もう高齢だから、疲れたから、お願いね、と丸投げするのではなく、次世代に託したいという思いと、そして、高齢者だから出来る自分の奉仕をもって、賜物をもって、あなたがたを支えるという表明。これを受けて、B教会では若い執事が立てられたのですが、その方々は委縮するでもなく、また、本当にその高齢の方の姿勢、支えると言う言葉が祈りとして伝わってきて、教会を担う自覚が生れたと、その若い執事の1人は感動を振り返りながら話してくれました。それを聴いて、私もとても熱くさせられたのです。今日、聖書から聴く「きょうだいたち」の響きが、時代を超えてイキイキと伝わってくるのです。私たちはよく祈って執事選挙を迎えたいと思う。その祈りは、選挙が終わって終わりではありません。執事を選ぶというのは、その執事のために祈り続ける。牧師を招聘するというのは、その牧師のために祈り続ける、ということの意味します。そして、その祈りの中で、神様のなされるわざを豊かに皆で受け取りたい、託すという奉仕や、支えるという奉仕もまた祈られていくものであることを受け取りたいのです。

・3つ目の話は、私が神学生時代のC教会でのことです。C教会での研修中に、「先生」と呼ばれる人たちが多くて、息苦しいな、配慮・配慮で疲れるな、ということを感じていたことがありました。幼稚園や学校の先生が多くいました。そんなに先生、先生言わなくていいのではないかと、私の出身教会の牧師に相談したのです。そしたら出身教会の牧師は「先生」という字は、「先に生れた」と書く。むしろ全ての人を、自分より先に生れた「先生」とみたらどうか」と返答してきました。自分は「ハッ」とさせられました。自分自身も、いつか「神学生」から、牧師になり、「先生」と呼ばれることになるだろう。でも、そこで、「先生」という言葉を聴く時に、いつも私は、逆に全ての人から学ぶ、「生徒」になりたいと思わされたのです。文字通り先に生まれた人だけでなく、同世代、また下の世代、子ども達も私の先生なのだ、と。14～15節。「すべての人たち」への善、平和の生き方が語られています。忍耐強く、粘り強く、相手の思いを知り、神の助けを求めて祈りたい、と思う。執事が誰になっても、楽しみしかないのですが、しかし、共にこの「学ぶ」という視点を大切にしたいと思っています。他者を理解しようとする時に、私たちはしばしば、自分のフィルターをかけてしまいます。この人はこういう人だから、仕方ない、と関わりをあきらめてしまったり、自己防衛の意味を込めて、そこで理解するのをやめてしまいます。理解するのをやめてしまう、ということは自分の思いもそこで伝えるのをやめるわけですから、心からの一致や和解は、大変難しくなるでしょう。しかし、「学ぶ」という言葉は、この限界設定を壊してくれます。自分のフィルターを新しくしてくれます。あれ？この人には、こんなタラントがあったんだ。こんな豊かさが。こんな良いところがあったのだ、と。神様が与えてくださった出会いと信じる時、私たちは互いに互いの先生となり、また生徒となることができるのです。そこにはきっとクリスチャンがどうかは関係ありません。主イエスが、最上の教師であることを心に留めて私たちは共に歩みたいと思います。

・続いてパウロは、教会の一人ひとりに対して、毎日の生き方を勧めます。「いつも喜んでいなさい」「絶えず祈りなさい」「どんなことにも感謝しなさい」大変有名な聖句です。私も大好きです。しかし、今この言葉の前で、立ち尽くすのです。「いや、喜べないですよ、神様」「いつも祈る、難しいですよ。」「どんなことにも感謝？できません」。コロナのことがあり、健康を害している方、仕事を失った方。不安の中にある方、いろんな苦しみを負っている人がいる。そのことを思う中で、ああ、喜びがありますね、とは言えない。世界で、差別のできごとによって苦しめられている人々の叫びが響いています。何を祈ったらよいのでしょうか。自分に一体、何ができるのでしょうか。自由を求めて、声を発する人々が痛めつけられ、人権と尊厳を奪われ、苦しめられています。これを感謝しろというのですか？コロナのことも落ち着かない中で、大雨によって冠水、浸水し、家が壊されている人々がいます。命を失う人が出ています。「いつも喜んでいなさい」・・・とても無理です。

私たちが生きることを思う中で、これらの聖句は、つまずきとなるのではないのでしょうか。今、皆さんそれぞれに置かれている毎日の状況の中で、このような喜べない時、祈れない時、感謝できない時があるのではないのでしょうか。それともこの聖句は、喜べる時だけのものなのではないのでしょうか。ハッピーで、満腹の時限定のものなのではないのでしょうか。祈る時間が沢山ある時だけのものなのではないのでしょうか。自分にいいことが起きそうな時に、ありがとうございます、神様と、言うだけのものなのではないのでしょうか。

今日、私たちは、これらの言葉に続く、「これこそ、キリスト・イエスにおいて、神があなたがたに望んでおられることです」(18節)を深く思い巡らしたいのです。私たちの苦しみの時、イエス・キリストはどこにおられるのでしょうか。私は、十字架で苦しめられている主イエスを思います。私の苦しみを共に負い、私と共に生きてくださる主イエスを信じています。私が祈れない時、主イエスは、私のために祈ってくださる神です。私が感謝できない時、その私の心の内を知り、神様のなされることを共に待ち望んでくださる救い主なのです。キリスト・イエスにおいて、神がこのように私たちに生きよと言ってくださっている。いつも、どんなときも、喜び、祈り、感謝するように。イエス・キリストがそうされた。苦しみを担い、共に歩んで下さる。だから、私たちは、主イエスと共に、このように生きることが許されているのです。苦しい時に、無理やりハッピーさを演出するものではありません。やせ我慢をして祈るのでもありません。心にも思っていない感謝をつぶやくのでもありません。心の内にある、喜べない、祈れない、感謝できないという思いを神の前に留まり、神にしっかりと私たちは告げ、神はその声を聞いて、動いてくださるのです。

私たちは、今日 18 節において、「あなたがたに」という言葉をも、大事に汲み取りたいのです。私たち一人が喜んでいいる時に、共に同じように喜びたい。そして誰か一人が苦しんでいる時に、共にその苦しみを負いたい。隣人の苦しみに大いに学びたいのです。

先週の日曜日、夕方に、連合少年少女会（10代）のオンライン・バイブル・ミーティングが行われ、瑞穂教会からも大人・子ども併せて、10名が参加しました。福井教会に4月から牧師として来られた平良憲誠先生、またお連れ合いの民枝さんをゲスト・メッセンジャーに。また今年の夏に、連合少年少女会で福井教会を訪ねる旅に参加してくれたU君から証しをしてもらいました。今年の夏、私も顧問としてその旅を企画、出会いに行きましたが、その理由は福井教会において、数年前牧師が辞め、それから80代の壮年が1人で礼拝をつづけているということを知ったからです。なんとか、教会を、礼拝を続けたい、牧師がきてほしい。その思いを同じ中部連合にある教会として聴き、とにかく行ってみよう。出会ってみよう、と企画をしたのでした。

昨年、8名で伺い、ボロボロの教会堂の掃除をし、壮年のDさんと証しを交わし、祈り合いました。礼拝と一緒に献げました。その前の週の出欠簿が受け付けに置いてありましたが、Dさんの名前、1名が書かれてありました。Dさんから、思いを伺いました。1名でもそんなに悲観的ではない。いつ誰がきてもいいように、礼拝を守っている。本音を言うと、ちょっとさびしいけれど、でもイエス様がいて、こんな風に同じ連合の教会が覚えてくださっている、それが嬉しい、ということでした。

U君は、この時も証しをしてくださいましたが、先週も少年少女たちを前にして、福井での体験を分かち合ってくださいました。「皆は一人で礼拝したことがありますか？僕は一人で礼拝したことがない。教会には誰かが来ていると思って礼拝に行っている。でも、福井教会に行ってみて、Dさんの話を聞いて、当たり前はない、ということを知った」と話してくださいました。「牧師がいること、礼拝堂があること、他の誰かが礼拝にきていること、当たり前ではない。だから、すごい感謝なことであること。この当たり前ではない、ということは、自分がコロナのことで、学校に数ヶ月行けなくなって、友だちと遊んだり、勉強できたりすること、これもやっぱり当たり前じゃないんだと福井での体験と重なるんだ」と分かち合ってくださいました。私は「アーメン」と思いました。

そして、平良先生たちです。本当に1名、Dさんがいてくれたということがかけがえのないことなんだと分かち合ってください、福井教会に牧師として招かれた思い、そして、これからの福井教会への思い、伝道の思いを分かち合ってくださいました。福井教会の礼拝堂は、シロアリに大分やられていて、耐震構造も60年前のもので、ある程度の地震がきたら倒壊するとのことが分かり、8月中か9月には立て壊すとのことです。でも、落胆していない。1名で礼拝を続けてこれたように、そこから、神様が礼拝をまた導き、喜びと祈りと感謝に導いているということ、希望をもって熱く語っていただきました。福井にいる、私たち瑞穂教会の仲間であるA子さん、B太君、C子さんも参加してくれて、福井教会の礼拝にもこれから顔を出したいと思いを分かち合ってくださいました。大変嬉しいニュースに溢れていたと思います。元気をいただきました。

苦しいところを一緒に通ったからこそその喜びの出来事があります。いのりと感謝の出来事があります。これはいつも1つです。パウロは、また、「わたしたちのためにも祈ってください」（25節）とよく語りました。平良先生も福井教会のために祈ってください、とおっしゃっていました。私たちもまた祈りつつ、そして瑞穂教会のために、私のために、祈ってください、という言葉が大事にしたいと思えます。いつも喜びに招き、絶えず祈ってください、どんなときにも感謝に導いてくださる神が、イエス・キリストを通してそのとおりにしてくださるという、信頼して歩む生を共に生きていきたいと、そう願っています。